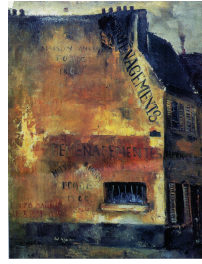


佐伯祐三のこと

前号からの続き

増野 喬

一九二四年十一月にパリ・モンパルナスの駅の近くにアトリエを構え、次々とパリ市内の街を描いた。そのころユトリロの絵を数多く見て、ユトリロ好きになったと言われている。「パリの街角」ではユトリロの影がみられる。サロンドートンヌに入選し絵も売れ始めた。その後の佐伯はパリの古びた石壁や、屋号の文字、フアサードなどに興味を持ち、盛んに描いた。一九二五年の「壁」は実際に土を塗り込めたと噂された分厚いマチエール、そして建築物に對峙する強い意志が感じられる。パリの街角を中心に誰も絵になるとは思わない靴屋や酒場なども題材にした。

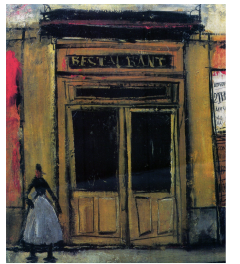


一九二六年病(結核)が進行し、家族の心配もあり日本に帰国した。しかし帰国後も精力的に制作し続け、二科会に出品し賞を受けている。日本の風景を描いたが、パリの風景とは異なり日本の風景は物足りないものであった。アトリエのあった「下落合の風景」、大阪の「肥後橋風景」を遺している。



一九二七年再びパリに赴いた。パリに帰り、街角の風景と共にポスターや広告に興味を持ち「広告塔」などを描いた。パリの雑然とした裏町を描いて、佐伯の独自の世界を作り上げた。しかし突然、壁や広告に関心を示さなくなり、モチーフを求めて郊外に赴く。一九二八年モランに写生旅行に行き其れを機会に作品は変化した。

モランの旅行には荻須高德、山口長男らも同行し、午前午後一枚づつ描き上げる荒事をやった。病の中でも佐伯の探究心は止むことはなかった。モランシリーズとして「モラ



ンの寺」が遺されているが単純化したフォルムと黒い線が表れている。三月にパリに帰り病気が深刻になる中「黄色いベスト」を描く。

そして恢復期の中に「郵便配達夫」と「ロシアの少女」を描いた。病気はますます佐伯の身体を蝕みその年の八月十六日この世を去る。享年三十歳、あまりにも若くおしまれる死である。佐伯のパリでの制作期間は僅か四年八月月である。佐伯はこの短期間にひたすら制作に没頭し、全生命を燃焼しつくしたのである。

支部展報告

埼玉西支部

小高峯夫

埼玉県川越市を活動拠点とする当支部は中尾会長が川越市在住なので、新日美発祥の支部とも言われてきましたがこのことを意識する支部員は少ない。中尾会長も高齢になり、支部活動には殆ど出席されないこともあり、お顔を知らない支部員もおります。

今年で第37回展になるが1回展から出品している支部員は私と岡田委員だけになってしまった。(中尾会長は賛助出品) これまでに亡くなった人、健康上退会した人、その他紆余曲折経年変化で支部員は当初からは殆ど入れ替わった。

さて今回展は年々優秀な作家が入会してきており、この川越市立美術館で開かれる展覧会としては注目されるものになっている。出品者は15人と少数ですが、出展数42点、内30〜100号が18点と大型が目立った、傾向としては水彩作品の割合が多くなってきた。昨年度から本展外部審査員の芳賀先生をお招きして画評を頂くイベントを加え一層充実した展覧会になった。

会期はゴールデンウィークと重なったが心配した入場者数にはさほどの影響はなく470余名でまざまざであった。当支部は埼玉県展入選作家7名、川越市美術協会8名を擁しております。この

ような人が集まる要因は、月2回の勉強会を欠かさず実行している事にあると思います。絵を描く人は向上心が強く描けば描くほど探究する必要があるものであり、支部活動はその要請にこたえている。



活動状況を少し披露します。支部活動の情報として「シンニチビン」を支部長自ら毎月発行し勉強会時に配布している、勉強会に出席できなかった人には当番の人が郵送している。活動拠点として生協コープの無料の部屋が借りられるので恵ま

れている。生協コープ出資会員が数名いるのでその資格を得ている。

毎月第2日曜日が勉強会で午前10時に支部員が顔をそろえ、会場当番の人がお茶とお菓子を用意してくれている。支部長の挨拶とシンニチビンの読み合わせが行われる。その後は各自持参した作品を前に出して自由画評を行う、午後は主にプロモデルを使ってデッサンやクロッキーの勉強を行う、これは自主的勉強で決めた指導はしない。毎月下旬には野外スケッチ会も欠かさず実行しており、夏には泊まり込みのスケッチ旅行、主に東北方面の温泉のある宿に泊まり親交を深める。

このような活動を十数年実行している。支部展はもとより販売を視野に入れた小品展も毎年銀座や近在の画廊で実行しており、活動に張りをもたせている。初心者も大歓迎しており支部会員でなくても勉強会に参加OKであり作品を持参すれば支部長始め適任者が無料でアドバイスしている。活動上必要な作業は全員が何かを分担するよう体制が整ってきている。比較的拠点近くに在住している人が多く出席率はすこぶる良い。

無念に思うのはこうした状況にも拘わらず大半の人が新日美展への関心が薄く出品しないことです。これは人それぞれの都合、事情がありその範囲でのことなので強制はできない。

埼玉東支部(33回展)

支部長 北條三郎

五月二十三日〜二十七日迄春日部市商工振興センターギャラリーにて開催いたしました。今回は3名の退会者があり会場が埋まりきるか危ぶまれたが、新入会の石村さんや会員の星名さん他全員が頑張ったせいいかどこに出しても恥ずかしくない「自分は今こんな仕事をしています」といったようなそれぞれの個性が出揃い、見ごたえのある発表会となった。

さて支部展は、会を重ねるごとに支部員の高齢化と相まって現状維持が精一杯でありなかなか人員補充は難しい状況である。特に埼玉東地区春日部周辺は、市商工センターギャラリー他4つの大きな発表会場があり地元の人々も他公募展の団体も多く集まってくる。

今やどこかの会や支部も不足で今回は前記の如く数名他会に移った為、困難を生じたが先ずは今回の会場造りや作品群は合格点であろう。問題になるのは、この地区は一線、純展、光陽、日洋、光風、近美等が強く当支部は僅かに押され気味となっている事である。そのような中で当支部はずっと13名前後で活動してきたがここにきて3名減らしてしまつた。最終日に全員で対策を話し合ったがなかなかいい案も出ず夏ごろまた集まろうということでの閉会とした。

今回支部展では、出品目録と一緒に本展のカラータラシを渡したところ会期が終わってから私宛に2名の問い合わせがあったので出品方法や絵の大きさ、搬入方法等詳しく説明した。よほど支部展の雰囲気良かったと思われ。1名の方は50号を製作中で完成次第写真を送りますとの事で、おそらく本展へ出品があり、その後は支部へ入会していただくと思つている。

どこの支部でもそうであろうが存続をかけた支部展を行っているのである。先ずは当支部も33回続いている。かつての最大31名には程遠いが現在底と思ひ今後は少しずつ伸ばしていきたいと考えている。